ペシャワール会・中村哲さん、灌漑工事事業でアフガニスタン大統領から叙勲

ペシャワール会大阪　加藤　勝美

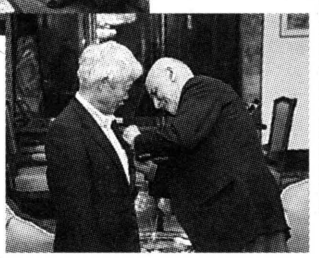
アフガニスタンのガニ大統領から中村さんに会いたいという意向が伝えられ、今年2月7日、官邸で会見が実現した。

中村さんは旱魃被害の実態を訴えるつもりだったが、大統領は逆に「私は問題の鍵を探していた。君の仕事がその鍵だ。会いたかったのだ」と言う。

筆者（加藤）は本紙昨年12月1日号に中村哲著『アフガン・緑の大地計画　伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』（石風社、17年6月）の紹介記事を掲載したが、同書はアフガンに適した灌漑工法を解説する技術書で、その英語版が国連食糧農業機関（ＦＡＯ）からガニ大統領に届けられた。そして、アフガンの土地管理局長からＰＭＳ副院長で医師のジア・ウル・ラフマンさんに、中村さんの経歴書を送るように連絡があった（ＰＭＳ＝ピース・ジャパン・メディカル・サービス＝平和医療団・日本）。

ガニ大統領はこの本を6時間かけて一気に読み、閣僚たちを「全力でこれを学べ」と叱咤したという。2月4日には農業省で説明会が開かれ、同省の灌漑専門技術者、ＰＭＳのジア医師とディダール技師が出席して、内容を検討し、同書は「単純に見えて深い内容」と評価された。

鈴鹿日本大使、パイカル土地管理局長、ドゥラニ農業大臣の列席のもと行われた授与式（ペシャワール会会報135号から）



中村さんは、ペシャワール会会報18年4月1日発行の135号に書いている。「大統領は小生（1946年生まれ）と同年配、パシュトゥン遊牧部族出身、見識のある方でかれようとしています。この確かな希望を身をもって守り育て将来に備えることです」。

またジア医師は言う。「これまで他の支援団体が何度も試みてはうまく行かなかった取水設備が、ＰＭＳの灌漑方式を取り入れることによって適切に機能し続け、十分な水量が得られるようになり、現地住民や政府にとって大きな意義をもたらしました」。

英語版『Afghanistan Green Ground Project』が日の目を見るまで多くの苦労があった。ＰＭＳ支援室の浦田菖平さんによると、日本語から翻訳されたものの編集が始まったのは昨年6月で、9月末に刊行されたが、支援室の全員が挿入写真選びや単語の大文字小文字など校正に神経を使った。この本は周辺四州のＰＭＳ職員、地域の農業指導者、水番、東部行政関係者と請負の技術者のトレーニング用教科書となる。中心となる会計作業は現地が行い、アフガンの政府関係、基金団体への会計報告書作成や資材管理の集計など多岐にわたる。

（18・4・5記）

アフガンの水資源開発に携わったＪＩＣＡ国際協力専門員・永田謙二さんからの手紙

うちに、冬が過ぎ、もう、春となってしまいました。本当に申し訳ありません。

私の研究論文について新聞記事を書いていただき、またその内容をご評価いただき、本当にありがとうございます。

私とアフガニスタンとの「出会い」は、アフガニスタン国家開発戦略に対して、ＪＩＣＡ有志の一員として、その水資源分野へのコメントを書いた2006年が初めてでした。その後、2009年頃からカブール新都市の水資源開発計画に携わるようになり、何度かアフガニスタンに出張し、政府職員と協議を行うと共に、新都市予定地や水資源開発現場を訪れました。それから約1年半後の2011年8月にアフガニスタン水・エネルギー省に長期専門家として赴任して2年半を過ごし、2014年2月に帰国しました。

この間、何度か「事件」に遭遇しました。最も大きな事件は、2010年1月、カブールの政府施設などへのタリバンによる大規模複合攻撃でした。地下室には、十数人の子供やお母さんが避難してきており、数時間、銃声と砲声を聞きながら待っていました。不思議と恐怖感はなく、自分がこのような現実に直面しているという感覚に乏しく、政府の人たちと地下室の中で、水資源管理の現状や現場の話を聴いて時間を過ごしていたことを覚えています。

カブール近郊農村の現地調査：近所の子供たちと共に

また、政府機関での勤務中、敷地に入るゲート付近で自爆テロがあり、爆音と共に執務室のガラスが大きな音を立てて震え、思わず廊下に飛び出したことがありました。アフガニスタンの職員たちは、ゆっくりと中廊下には出てきているものの、「またか」と困ったような顔をしていただけだったのが印象的でした。このような「事件」は、厳冬の季節になると冬休みになるのですが、季節が緩むとタリバンは「春の大攻勢」を宣言し、「事件」は概ね2ヵ月に1回は起こり、それが常態化している状況でした。今現在の治安状況はさらに悪化しているようです。

私の研究論文の根本主題は、「アフガニスタンが平和になるために、復興と再建をどのように実施していくべきか」ですが、これは、上記のような事件を何度も現地で体験しながら、「国際社会が大きな資金と人材をつぎ込んで、10年以上もアフガニスタンを支援し続けているのに、なぜ治安は回復しないのか」という素朴な疑問から始まりました。

そして、2年半のアフガニスタン滞在中に、水資源政策の中枢で水・エネルギー省の副大臣や局長達と議論し、世界銀行やアジア開発銀行などのドナーと共に協調しながら、アフガニスタンの水資源政策について考えてきました。そのような時、中村哲先生が主導するマルワリード灌漑事業が大きな成功を収めていることを知りました。灌漑用水を農地に届けるだけではなく、それによって地域社会が豊かになり治安が安定して、地域の人々が家族と共に生きていけるようになった。その地域社会を重視する土木事業と計画・実施プロセスと成果に注目しました。アフガニスタンの農村では、戦乱と渇水の二重苦で、家族を養うことができず、しかたなく、軍閥の下で戦闘に参加して給料をもらっている人も多かったと聞いています。自分と家族が「安心して尊厳を持って生きていける」ようになれば、アフガニスタンの多くの人々は、戦争などしたくないのです。

マザリシャリフ近郊でガードマン達と共に

水・エネルギー省での副大臣を交えた会議風景

私の論文の結論は、「アフガニスタンという国を支える地域社会の人々のニーズに、国が真に向き合って政策を進めれば、必ず、アフガニスタンの復興は実現する」ということです。ペシャワール会が支援するＰＭＳによる水資源・灌漑事業は、まさしく地域社会のニーズに応える事業であり、今後、このような事業をアフガニスタン全土に広げていければ、必ずアフガニスタンの再建はなると思います。その先頭に立っているペシャワール会とＰＭＳに、私自身が僅かでもお役に立てているとすれば、本当に光栄なことだと思っています。そして、長い時間が必要であるとは思いますが、ＰＭＳ方式による水資源・灌漑事業のアフガニスタン全土への普及を、是非、後押ししたいと考えています。

今後とも、ＪＩＣＡとＰＭＳとの共同事業に、ご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い致します。また、お会いできるのを楽しみにしています。

2018年4月2日　永田謙二

追伸

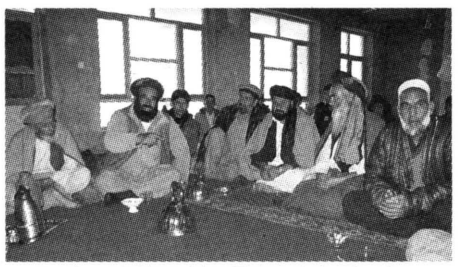
3月30日に、久しぶりに博多に行き、中村先生や村上会長、福元さんや藤田さんなど、ペシャワール会の方々とお会いしました。中村先生の元気なお姿を見、親しくお話させていただいて、楽しいひと時でした。

銃声と砲声、自爆テロのなかで

永田謙二

加藤勝美様

陽光うららかな季節になってきました。いかがお過ごしでしょうか。12月にお手紙を頂いておきながら、どのように御返事を書こうか迷っている



カブール近郊の村で長老たちと話し合い

■永田謙二
独立行政法人国際協力機構　国際協力専門員（水資源・防災）。1956（昭和31）年、大阪府松原市まれ。1980年、東京農工大学大学院修士課程修了、八千代エンジニヤリング株式会社入社。2005年、国際協力専門員（水資源・防災）として国際協力機構（ＪＩＣＡ）に入構。2011年から3年間、アフガニスタン国水・エネルギー省にＪＩＣＡ専門家として赴任。2017年、東京大学大学院博士課程修了（博士：国際協力学）。主な邦語論文に「半乾燥地域における洪水への対処―チュニジア国メジェルダ川の事例」土木学会誌2010年8月号特集『極端気象に備える』、「アフガニスタンにおける水資源セクターの復興支援政策」水文・水資源学会誌30巻4号（2017年）。